

第一部 江戸川乱歩『貼雑年譜』の成立と継承

後藤隆基

1 書誌と概要

『貼雑年譜』は、日本の探偵小説界を牽引した作家、江戸川乱歩（本名・平井太郎。1894～1965）の手製による編年体の回想的自伝資料である。1894（明治27）年から1964（昭和39）年まで、乱歩が収集・整理・保存した自分自身にかんする資料や記録を年代順に貼り付け、その説明等を記した、全9冊のスクラップブックである。乱歩自身は「貼雑帳（帖）」とも呼んでいた。現在は、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターの寄託資料となっている。各巻の背に記載された収録年代と寸法（外寸とパーレン内は本文用紙の内寸）は以下のとおり。

- 第1巻 1894（明治27）年～1928（昭和3）年
縦300mm（295mm）、横439mm（433mm）、厚さ39mm（37mm）
- 第2巻 1929（昭和4）年～1940（昭和15）年
縦302mm（295mm）、横439mm（435mm）、厚さ45mm（41mm）
- 第3巻 1941（昭和16）年～1945（昭和20）年
縦302mm（295mm）、横439mm（437mm）、厚さ38mm（32mm）
- 第4巻 1946（昭和21）年～1950（昭和25）年
縦299mm（295mm）、横437mm（435mm）、厚さ40mm（32mm）
- 第5巻 1951（昭和26）年～1954（昭和29）年
縦299mm（290mm）、横439mm（435mm）、厚さ37mm（30mm）
- 第6巻 1954（昭和29）年～1957（昭和32）年
縦299mm（292mm）、横439mm（437mm）、厚さ38mm（34mm）
- 第7巻 1957（昭和32）年～1960（昭和35）年
縦296mm（290mm）、横442mm（431mm）、厚さ46mm（40mm）
- 第8巻 1960（昭和35）年～1962（昭和37）年
縦297mm（289mm）、横442mm（435mm）、厚さ45mm（37mm）
- 第9巻 1962（昭和37）年～〔1964（昭和39）年 ※中絶〕
縦297mm（289mm）、横443mm（435mm）、厚さ44mm（37mm）

『貼雑年譜』は乱歩の手製本で、表紙は、第1巻と第2巻のみ、ボール紙に乱歩の母きくの帯地を用いて表装されており、第3巻以降は既製の布表紙と思しい。本文用紙は薄茶色のハترون紙で、横開きの右

側綴じ部分——天寄りに2か所、地寄りに2か所、やや間隔をあけて千枚通しで穴が開けられ、それぞれに紐を通した平綴じである。背の白い題簽に「貼雑年譜」の墨書きと、インクで丸囲み数字（巻数）と収録年代が記載されている。

本文用紙に貼り込まれた原資料は、膨大な国内外の新聞雑誌記事の切り抜き、少年期の自製の雑誌や同人誌、原稿、書簡（葉書、便箋、封筒、切手）、写真、名刺、チラシ、プレスシート、各種書類、広告、パンフレット、青焼き、転居変遷記録や住居の間取り図、種々のメモ等、2600点以上に及ぶ。多種多様な種類の紙資料が含まれ、自筆の書き込みも、ペン書き、墨書き、朱書き、鉛筆書き等が混在している点に特長がある。第1巻と第2巻には自筆の書き込みがきわめて多いが、第3巻以降は原資料の貼付が大部分を占める。なお、付属として「出生ヨリ四十七オマデノ鳥瞰図」が挟み込まれている。

中島河太郎が「本書はあくまでも乱歩個人の業績を俯瞰するには好都合だが、探偵小説界の全貌を知るには偏りすぎている。／乱歩に関する資料を年代的に並べた一種の伝記であって、その収集癖を満足させた異色の自伝」（「貼雑年譜」について）、江戸川乱歩『貼雑年譜』講談社、江戸川乱歩推理文庫特別補巻、1989年）と述べたように、資料が語る乱歩の自分史であり、乱歩という一人の作家の視点を軸にした日本探偵小説変遷史でもある。と同時に、貼り込まれた原資料群じたいが、明治・大正・昭和期の文化状況を伝える一次資料のデータベースを形成し、江戸川乱歩／平井太郎の生涯と各時代の世相がいかに切り結ぶかをあぶり出す稀有な記録となっている。そこからは乱歩がいかに受容されてきたかの様相も看取できるだろう。

『貼雑年譜』成立の事情については「昭和十六年四月初旬」の日付と「平井太郎誌」の署名が記された「序」に簡潔な説明がある（1_001）。

時局のため文筆生活が殆んど不可能となつたので暫く休養する事にした。その徒然にふとこの貼雑帖を拵へて置くことを思ひ立つた。探偵小説を書き出して以来折にふれて切取つて順序もなくスクラップ・ブックに貼りつけて置いた印刷物などを年代順に整理し、その他の古手紙、文反古などをあさつて、ごく大略ながら私の過去を描いて見た。日記といふものを殆んどつけてみない私には、これが謂はゞ四十七年間の大ざつばな日記である。印刷物と文反古による貼りませ自伝である。

1939（昭和14）年3月31日、警視庁検閲課は、乱歩の短編集『鏡地獄』（春陽堂文庫、1936年）から「芋虫」の全編削除を命じた。当初は同作のみに対する処置で、翌年末頃までは版を重ねた著作もあった。しかし、1941（昭和16）年からしだいに出版社が文庫本や少年ものまで重版を自粛するようになり、翌年には事実上すべて絶版状態。新作の発表も禁じられ、原稿の執筆依頼が途絶えた。それを機に、長年収集・保存していた資料を整理し、1941年1月から4月にかけて作成されたのが『貼雑年譜』2冊（のちの第1巻と第2巻）であった。

最終的に全9巻を成す『貼雑年譜』だが、先述のように、最初の2冊だけが乱歩の母きくの帯地を用いた表装で、第3巻以降とは成り立ちが異なる。乱歩の令嗣で立教大学名誉教授だった平井隆太郎氏（1921～2015）によれば、当初「貼雑帖は二冊で完結して」おり、「後続の七冊は全く予定されていなかった」（『乱

歩の軌跡 父の貼雑帖から』東京創元社、2008年、224頁）。また、新保博久氏は「桃源社版『探偵小説四十年』扉に印刷された写真で題簽を見ると、現存のものとは違って「①」でなく「上」となっており、二巻本構想であったと察知される」（「注釈」、江戸川乱歩『探偵小説四十年（上）』光文社文庫、2006年、803頁）と指摘する。付け加えると、新保氏が注目した写真には背と表紙に題簽がみえるが現存するものは背のみであり、後年に貼り替えられたことがうかがえる。

乱歩が数え47歳——1940（昭和15）年の段階で『貼雑年譜』を完結させる予定だったことは、「序」の「謂はゞ四十七年間の大ざつばな日記」という記述や、付属資料の「出生ヨリ四十七オマデノ鳥瞰図」によっても裏書きできる。

しかし、戦後10年ほどが経って、乱歩は『貼雑年譜』の続編製作を企図しはじめる。そのための資料や材料は収集・分類され、保存されつづけていた。

戦争中探偵小説が禁じられた暇にまかせて、集めておいた資料のうち、手紙や数頁にわたる切り抜きなどは袋に入れて分類し、小さなものだけを年代順に貼りつけて、二冊の大きな貼雑年譜というものを作ったが、今後も暇ができれば第三冊、第四冊とつづけて行くつもりである。この貼雑年譜は、思いつきなど書く時に非常に役に立つ。私は数年間「寶石」に「探偵小説三十年」という回顧録を連載しつづけているが、その資料は大部分この貼雑年譜から出ている。

（「蒐集癖」『江戸川乱歩全集』付録冊子、春陽堂、1955年7月）¹

上の引用に鑑みれば、1955年7月の時点で『貼雑年譜』は第2巻までしか存在しなかったことがわかる。当時『寶石』に連載されていた「探偵小説三十年」——のちに『探偵小説四十年』（桃源社、1961年）として結実する「回顧録」のなかで、乱歩は折にふれて『貼雑年譜』に言及しており、それは執筆の基礎資料としてつねに立ち返るものだった。したがって『貼雑年譜』の第3巻以降の成立過程について考えるとき、『探偵小説四十年』の執筆過程が重要な傍証となるのである。

2 『探偵小説四十年』との往還

乱歩の大部な自分史である「探偵小説三十年」（『新青年』1949年10月～50年7月。『寶石』51年3月～56年1月）²と「探偵小説三十五年」（『寶石』1956年4月～60年6月）、それらを集成したうえで1957（昭和32）年度以降の出来事を加筆した『探偵小説四十年』（前出）が『貼雑年譜』に材を採っていることは、その「自序」にも明らかである。

私は日記が書きつづけられない性分だから、自分に関する記録は何でも収集しておくくせがあり、新聞、雑誌の切り抜きなど丹念に保存して、その大部分は「貼雑帳」という大きなスクラップ・ブック数冊に貼りつけてある。〔略〕この回顧録は主として貼雑帳の資料によって書いた、というよりも、鉄

と糊でそれらの資料を貼り合わせ、そのあいだあいだに、自分の文章を書き加えたというのが正しいであろう。記憶力の極度に低い私は、こういう資料でもなければ、とても長い回顧録など書けなかったと思う。しかし、考えてみると、すべてその当時の記事によってしるすというこの方法は、記事そのものの間違いは正し得ないにしても、筆者の記憶ちがいを防ぎ、できる限り真実に近い記録を残すという意味では、大いに取柄があり、この形式の回顧録もまた一つの行き方ではないかと思うのである。³

前述のように、当初『貼雑年譜』は2冊のみであり、その記述(記録)は1940年度で終わっているから、それ以降を回顧するためには『貼雑年譜』の続き——1941年度から先が編まれる必要があった。このあたりの背景については、山前譲「資料不足の戦中、駆け足の戦後」(「解説」、江戸川乱歩『探偵小説四十年(下)』光文社文庫、2006年)に祖述されており、本稿でも参照した⁴。

乱歩は、1949年10月から「探偵小説三十年」を『新青年』に連載していたが、同誌が休刊(1950年7月)すると、舞台を『宝石』に移して1951(昭和26)年3月から連載を再開。しかし、1940年度分を書き終えた第50回(1955年11月)で、肝心の『貼雑年譜』を使いきってしまう。そこで乱歩は、時系列のずれを自覚しながらも、戦時中の随筆等を再録して、ひとまず休載を免れている。その間に、1941年度分からスタートする3冊目の『貼雑年譜』製作に着手したのだろう。しかし、第51回(1955年12月)の冒頭に以下のごとくある。

前回までで、貼雑帳が終つたので、その後は幾つかのハترون袋にたまっている切抜きを整理した上でないと記事がつづけられないので、その整理にとりかかったが、資料が多岐に亘つていて、この原稿の締切りまでに整理が出来なかつた。ここで一回ぐらい休載してもいいのだが、編集の方で、六頁分のこしてあつて、今更ら他の原稿を入れることも出来ない事情なので、とりあえず、昭和十七年以後に執筆したごく僅かの随筆雑文のうち、戦時、私の心境変化を示すようなものを選んで、左に掲げ、休載を避けることにした。⁵

このときに収録されたのは、「町会日記」(『読売新聞』1942年11月22日)、「歴史に生きる」(『東京日日新聞』同年12月9日)、「島隠れゆく藤鱧」(『新青年』1943年1月)、「庭園の変貌」(『新緑』1944年11月)の4本。「庭園の変貌」は第52回(1956年1月)にも分載され、それでも埋まらなかった余白に「祖先と古里の発見——生誕碑除幕式のこと——」を書き下ろしている。

この記事は、本稿の終りの方に書くべき事柄であるが、前号に記した昭和十七年以降の資料整理がまだ出来ないのと、ちょうどこの十一月三日に、私の生れた地に生誕碑が建ち、除幕式に列席したので、忘れぬうちに、この模様を書きとめておきたい意味もあつて、今一回、年代順によらぬ記事を書くことにした。⁶

ただ、やはり「探偵小説三十年」の新稿を執筆できるほどに資料整理は進まなかったようで、第52回をもって連載は一時中断。休載期間をとって未整理資料を整理し、同年4月から「探偵小説三十五年」と題を改めて仕切り直した。その第1回（1956年4月）は「資料皆無の昭和十六年度」なる小見出しで、こんなふうには書き起こされる。

私の貼雑帳は昭和十五年度で終わっているのだから、そのあとは、ハترون袋に入れてある切り抜きを整理し、又戦争中の小説以外の資料を整理しなければ、書きつづけられないのだが、この資料の保存が甚だ不備で、気まぐれで、整理して見ると、記憶に残っている出来事の資料を全く欠くものが相当ある。いつもいう通り、私は日記の書けない性格だから、新聞その他の印刷物の切り抜きにたよるほかないのだが、それが戦争中のものはひどく不揃いで、少年読み物など、発表の年月さえわからなくなっているものがある。⁷

連載と資料整理の連動する様相について、山前譲氏は「以後年度変わりのときに、大きなハترون紙に年度ごとにまとめた切り抜きを整理し、まず「貼雑帳」に貼ってから、書きすすめていくことになる。いわば自転車操業だが、それでも、残された三冊目以降の『貼雑年譜』を見ると、じつに整理整頓されて記事の貼り込まれているのは乱歩らしいところだ。ただ、さすがに、最初の二冊と同じくひとつひとつの記事に細かくコメントを書き込む時間はなかった。だから、「探偵小説三十五年」の連載がそのコメント代わりと言える。あくまでも、オフィシャルなものだが」（「資料不足の戦中、駆け足の戦後」前出）と解説している。

では、試みに「探偵小説三十五年」や『探偵小説四十年』のなかで『貼雑年譜』にかんする記述がみえる箇所をたどってみよう。

乱歩は「探偵小説三十五年」で、第2巻よりあとの時代にかんする部分を「続貼雑帳」とも呼んでいた。たとえば、1943（昭和18）年度の記述には「続貼雑帳の資料を整理して、ともかく年月順に貼りつけて見たが、手紙や切り抜きが甚だ気まぐれな保存のしかたで、資料として不完全なのが遺憾だが、資料のないものは全く記憶がないので、あるものだけについて書きしるすほかはない」（「探偵小説三十五年」第5回、『宝石』1956年8月）⁸とある。この時点では『貼雑年譜』の第3巻にあたる箇所が「続貼雑帳」として形を成しつつあった。

やや時が下り、1954（昭和29）年度の「主な出来事」の冒頭には、以下のようにある。

この主な出来事を書くのに、どうしても貼雑帳が必要なのだが、二十九年からは、まだ貼りつけてなく、大きなハترون袋に、一年ずつの分が、順序もなくつめこんであるので、それを整理して貼りつけるのが一仕事であった。⁹

初出誌に上の記述はみえず、単行本化に際して加筆されたものと思しい。ともあれ、この時点で『貼雑年譜』は、第5巻の途中まで進んでいたようだ。

また、乱歩の資料収集方法に言及した箇所もあって興味深い。1954年6月に刊行された乱歩の評論集『続・幻影城』（早川書房）にかんする書評等の「切り抜きと手控え」が5紙分しか紹介できないことについてふれた部分をみてみよう。

現在は切抜通信社というものがあって、全国地方新聞の切り抜きも送ってくるから、何の記事でも大量に手に入るが、当時はそういう便利な通信社がなく、自分の眼に入ったものしか集められなかったわけである。

（「探偵小説三十五年」第35回、『宝石』1959年3月）¹⁰

『貼雑年譜』の後半の製作にあたっては、乱歩がリアルに眼を通して選別したものだけでなく、専門業者による網羅的な資料収集が手伝ってもいたようだ。むろん、その中から乱歩が取捨選択し、貼り込んだのちがいない。しかし、そのことは「乱歩自身による収集」という特異性の希薄化と情報の均質化をもたらした、などといえば大仰だろうか。

そうして、1960（昭和35）年6月、1956（昭和31）年度分を書き上げた「探偵小説三十五年」は第49回をもって連載を終え、翌1961年に『探偵小説四十年』として単行本化されたのである。

その後も『貼雑年譜』の製作は継続される。第3巻以降について、平井隆太郎氏は「暇を見ては順次作り上げて行ったのであろうが、表紙が既製品できれいに揃っているところを見ると製本としての完成は七冊が同時であったに違いない」（『乱歩の軌跡』224頁）と推測している。ただ、第9巻をみると、背の題簽には「昭和37…」と開始年のみで終わりが書かれておらず、本文用紙には1964（昭和39）年4月までの資料が貼付され、以降は余白をのこして作業が中絶している。1965（昭和40）年7月に死去するまでの諸資料もハトロン紙の袋に分類・保存されており、病後の体調回復を待って、続きにとりかかろうという心算だったのだろう。しかし、結果的に第9巻が、着地点の中途のまま、最終巻になった。こうして乱歩の『貼雑年譜』は更新を終えるのだった。

3 復刻版の公刊——講談社版と東京創元社版

『貼雑年譜』は、個別に直接閲覧の機会を得た人が少なからずおり、折々で回想がのこされている。メディアで紹介されたり、展覧会等に貸し出されたりした例もあったが、本来は「門外不出」として外界に閉ざされていたこの資料が、いかにして平井家の「外」に出ることになったのか。

まずそれは復刻版という形で公にひらかれていく。

1989年に講談社から「江戸川乱歩推理文庫」シリーズが刊行された際、特別補巻として『貼雑年譜』の第1巻と第2巻を抜粋し、縮小したモノクロ写真版を復刻した（定価3000円）。このときは、台紙に貼りきれない印刷物や書簡類は復元が困難であることから割愛されていた。

2001年には、東京創元社が同じく第1巻と第2巻の「完全復刻版」を刊行した。完全予約制で限定200

部、本体価格 30 万円。東京創元社取締役社長・会長等を歴任した編集者の戸川安宣氏を中心に進められた原本の完全復刻にあたっては、紙資料修復工房代表の花谷（当時・脇）敦子氏が、解体から修復までを担当した。企画実現までの経緯や具体的な作業工程等については、東京創元社版の解説冊子（戸川安宣執筆）、戸川安宣＋花谷敦子「江戸川乱歩『貼雑年譜』ができるまで」（南陀楼綾繁『蒐める人——情熱と執着のゆくえ』皓星社、2018 年。初出は『sumus』10 号、2002 年 9 月）でくわしく語られている。

平井家から借り出した原本を花谷氏が解体したあと、全ページを撮影し、復元後に返却するという手順で作業は進められた。複数の資料の貼り込みが重なっており、上のものをめくらなければ下のものが見えない箇所も多くあった。貼り込みや書き込みなどを能うかぎり忠実に再現するという編集方針のため、花谷氏は最初に表面の文字や紙じたいを傷めずに貼り込んである紙を剥がせるかどうかのテストをおこなっている。

戦時中につくられたスクラップブックでは、糊もセロファン・テープもいろんな銘柄が使われているんです。たぶん乱歩さんも手元にあるものを意識せずに使ったと思います。だから、見るからに違う種類の糊がいくつもあるんです。貼られてからどれくらい年月が経っているかによって、原本を傷めなければ剥がせないものが必ずでてくるのです。

（『蒐める人——情熱と執着のゆくえ』前出、57 頁）

中には、明らかに戦後の糊が使われていたり、何度か貼り直されていたり、何かを剥がしたりした痕跡も見られた。それらを慎重に見極めたうえで、花谷氏は、撮影や印刷で対応できる場合は貼付資料を剥離しない判断を下し、いかに原本を傷めることなく作業を進めるかを大前提とした。結果的に約 30 か所、原本の貼り込みを剥がしたという。

他にも『貼雑年譜』を一度解体することで、乱歩の手になるさまざまな製作過程が解明された。

たとえば、原本に使われている用紙（ハترون紙）の中央、天から 20mm、地から 20mm の場所に楕円形の穴があいていること。かつて、用紙を中央で二つに折り、ページを広げた状態で何枚か重ね、上下の穴に針金を通して束を止める形式のスクラップブックがあったが、乱歩はその用紙を折らずに伸ばしたままの状態でも片側の端を綴じて使用したものと推測された。綴じ方にかんしては、2 本の紐を通しただけの平綴じで糊も使われておらず、ノドの部分に厚みを調整する「枕」という小さな紙片が入っていたこともわかった。

東京創元社が完全復刻版をつくらうとしたのは、乱歩が最初の 2 冊を製作した 1941 年から 60 年の歳月が経った時点の『貼雑年譜』であり、その間に何かを剥がしたらしい跡や後年書き加えられた朱字等が散見し、それらをどこまで再現するかが「完全復刻」を謳う際の問題となった。戸川氏は「今回の復刻では、現存する原本の状態をできるかぎり再現をすると同時に、そうすることに意味があると思われるところでは、当初そうであったと思われるようなかたちに復元するよう努力」（『蒐める人——情熱と執着のゆくえ』前出、61 頁）したと述懐している。そこには、乱歩自身が『貼雑年譜』を手製したのと同様——否、他人の手になるものの、時間をこえた「完全復刻」をめざした点において、むしろ乱歩以上の執念さえも感じ

させる仕事であったといつてよいかもしれない。

4 立教大学への寄託——修復・保存・デジタル化

江戸川乱歩の旧蔵資料等を取り巻く環境に大きな変化が訪れたのは2002年。その年の4月、乱歩の膨大な蔵書や資料等が、旧邸や土蔵、敷地等とともに立教大学の所有となった。1999年、豊島区が平井家から資料や不動産等を購入して乱歩記念館を設立する構想を発表し、翌年調査に入ったが、財政上の理由等で計画が頓挫。そこで、旧江戸川乱歩邸に隣接する立教大学が、平井隆太郎氏との関係や文化財保護等の観点から、豊島区に代わって資料や不動産等の一切を引き受けることになったのである。

2002年から資料の受入と整理に着手し、2003年には西武池袋で、2004年には東武百貨店池袋店で大規模な乱歩展を開催、新収蔵資料をひろく展覧に供した。とくに後者は、立教学院創立130周年事業の一環で「江戸川乱歩と大衆の20世紀展」と銘打ち、土蔵（2003年に豊島区有形文化財指定。区の補助を受けて破損していた外壁の補修や建設当時の鼠漆喰への復原等を実施）も一般公開された。2006年には、旧江戸川乱歩邸を拠点とする大学附置研究機関として、学内に江戸川乱歩記念大衆文化研究センターを設立。以来『貼雑年譜』は同センター寄託資料として管理されている。

先述したように『貼雑年譜』は多種多様な素材が使用されており、とくに紙の保存状態の劣化が危惧された。そのため、立教大学に寄託されてから、京都の経師である株式会社大入に、原資料の保存状態を確保するための修復および劣化防止の処理を委託することになった。

2009年度に株式会社大入（担当・品川晃二氏）から修復作業の提案を受け、大衆文化研究センターでは、全9巻の修復および保存処理とデジタルアーカイブを視野に入れたデジタル化にかんする3年計画を立てた。初年度（2010年度）に第1～3巻、次年度に第4～6巻、最終年度に第7～9巻の作業完了を予定したもので、次いでレプリカの作成も検討されていた。

実際の作業は、2010年度から2015年度にかけて、全9巻の修復と保存処理、スキャニングが順次おこなわれた。本節では、株式会社大入から提出された報告書および「図書館総合展」における品川晃二氏の発表「江戸川乱歩『貼雑年譜』の保存処理 近世・近代資料の保存処理」（2012年11月21日）¹¹をもとに、修復・保存作業の過程を具体的にたどってみたい。

最初に、以下の項目で現状調査がおこなわれた。

- ①各ページの資料の照合
- ②剥落、汚損、亀裂、摩耗、欠損、破れ等の記録調査
- ③寸法測定
- ④貼り込まれている原資料の紙質調査
- ⑤自筆文字の材料判定
- ⑥酸性劣化の調査、ph測定

⑦脱酸処理に不適切な資料の選定

これらを経て、各資料に応じ、画一的な処理は施さない旨の修復・保存方針と作業工程の検討が図られた。

まず、表紙（先述のように、第1巻と第2巻は乱歩の母の帯地、第3巻以降は既製品を使用）にかんして、修復前は、布の劣化、角や折れ部分の剥落等があり、背の題簽は酸性劣化の影響で一部欠損がみられた。綴じ紐も経年劣化により、強度が低下していた。これらは全巻に共通するが、とくに第1巻と第2巻が甚だしく、製作時からの経過時間や素材の問題も大きい。

そこで、各巻を全解体したのち、布と題簽部分に裏打ちをほどこし、表紙と裏表紙の芯材が酸性の場合は中性のものに改め、綴じる紐も新調した。なお、修復前の状態と視覚的な印象を変えないために、布や題簽の欠損部には補填、補彩をおこなっていない。このことによって、将来的な保存状態の確保はひとまず遂行された。ただし、乱歩自身が直接手作業でつくった痕跡じたいは失われたとあってよい。

表紙の見返しも酸性劣化が進んでおり、直接接触している台紙のページを酸化させていたため、見返しを表紙から取り外して脱酸処理をおこなった。

次いで本文用紙は、各巻各ページで状態が異なるため、全巻全ページの調査をふまえ、台紙ごとに個別／共通の課題に対処した。

台紙、貼付資料ともに酸性劣化が進行しており、変色箇所も多く、原資料同士のあいだで酸の移行もみられた。たとえば、右ページに貼られた新聞記事の切り抜きと接する部分において、左ページの酸性劣化が進み、変色しているといった具合。ことに古い新聞紙等は酸性劣化の進行がひどく、資料自体の損傷につながる恐れがあった。一部の巻につけられていた見出し（タグ）の劣化や摩耗、外れかけているものもあったため、解体し、裏打ちを施して劣化を防止。さらに箱を作成して保護することとした。

試験紙による目視での pH テストの結果、台紙の pH 値は概ね 5~6 の間を示した。現状では保存上、問題がないと思われる台紙にも、将来的に酸が移る可能性があり、『貼雑年譜』全体の酸化が加速する懸念もあった。すでに台紙じたいも酸性劣化が進行していたため、永続的な保存を図るために、原資料だけでなく台紙にも脱酸処理を施した。その際、台紙および資料上の書き込みの中には、インクやペン等の水溶性の素材で書かれたと思しい箇所が多くみられたことから、脱酸処理は水分の影響を与えないブックキーパー法（アメリカで開発されたブックキーパー溶液を紙に浸透させる手法で、水を使わない特徴がある）で実施した。

『貼雑年譜』には、さまざまな種類の資料が、さまざまな状態で貼り込まれている。それら資料一点々々の繕い（欠損部分の補修や破れ部分の補強等）をおこない、かつブックキーパーの薬剤を台紙に含浸させるため、資料を台紙からめくれる状態に注意深く剥がした。その際、極力水分を用いず、竹べらを用いている。新聞記事の切り抜きなどは、台紙からめくれる状態まで剥がし、資料裏面および台紙にブックキーパーの薬剤を含浸させたが、写真には脱酸処理を施すことができないため、台紙から完全に外している。台紙だけでなく、酸化が進行していた部材にも処理が施された。台紙への固着が弱かった資料にかんしては、完全に剥がしたあと、個別に脱酸処理を施した。

各ページにブックキーパー法で脱酸処理を施し、同一箇所¹の pH 値に向上 (7~8) が見られたことを確認後、剥がした本紙を原装どおりに再度製本。その際は新調した綴じ糸で、原状と同じ綴じ穴を利用しておこなっている (何度も綴じなおした跡が見られた)。

さらに、修復・保存処理の過程で、原本の全解体直後、再製本 (復元) する前に全巻全ページのスキニング (撮影ではない) を順次おこない、デジタルデータを作成している。修復中だからこそ保存可能なデジタルアーカイブである。製本状態と異なり、各ページごとに平滑な状態でスキニングが可能のため、ノド (本の綴じ穴側) 付近まで高精細な画像データを得られた。

2015 年度に修復・保存とデジタル化の全作業が完了。あわせて、第 1 巻 (中身のページは冒頭から 22 ページまで。あとは用紙のみ) と資料の貼り込み等がない計 2 冊の複製がつくられたことも付言しておく。

5 後世にのこす——オンライン版の意義と課題

東京創元社の完全復刻版で原本の解体・修復作業を担った花谷敦子氏は、前掲したインタビューの単行本化 (2018 年) に際して、以下のように述べている。

いきさつはわかりませんが、数年前、『貼雑年譜』は京都の経師により、全解体が行われました。恐らく私が「紙の劣化が激しく脱酸性化処置 (酸性紙を中性以上にする処置) は必要」と言い残したことも要因かと思います。乱歩さんのお母様の着物の帯で仕立てた表紙は布がすべて剥がされ、芯材のボードは新しい中性紙に取り替えられました。中身の頁も同じく、乱歩さんの手の痕跡は失われました。日本では、掛け軸や屏風、建築に至るまで、仕立て直すことが風土としてあります。それは高温多湿の気象条件から生まれた生活の知恵かもしれません。その風土の中で、手稿 (ドキュメント) をあるがままに残すこと、その理解を得ることの難しさを改めて感じると共に、戸川さんの完全復刻版への決断に、今更ながら先読みの深さと愛情を感じます。〔略〕ドキュメント (情報) をどのように遺すのか、知恵を出し合える場が増えることを心から祈ります。

(『蒐める人——情熱と執着のゆくえ』前出、64 頁)

前節で述べたごとく、立教大学の寄託資料となった数年後、『貼雑年譜』は株式会社大人によって全解体され、修復と保存処理がほどこされた。花谷氏が指摘するように、その過程で、乱歩自身が実際に作成した当時の状態ではなくなった。ドキュメントのオリジナル性に対する見方等の問題は、今後、各業界を横断して検討されるべきであろう。

資料じたいのモノとしての保存とともに、そこに刻まれた種々の情報をいかに後世にのこし、伝えるか。そのためには、資料を構成する諸要素の物質的な劣化など「時間」に抗する手段を講じねばならない。『貼雑年譜』に限らず、時々刻々と劣化の危機にさらされている膨大な乱歩旧蔵資料の保存環境の整備も立教大学にとっては喫緊の課題である。

そうした中で、株式会社大入によって作成された『貼雑年譜』のデジタルデータの活用が次なる検討課題だった大衆文化研究センターは、丸善雄松堂のJ-DAC「近代文学作家自筆資料集」をプラットフォームとして『貼雑年譜』全9巻を詳細な目録付きでオンライン公開することになった。オンライン版『貼雑年譜』は、従来公開されていなかった第3巻から第9巻までの全巻公開という意義はもちろん、遠隔地から閲覧が可能になる利点がある。資料現物の保存という観点に鑑みても、諸分野においてデジタルアーカイブは重要性を増している昨今、オンライン資料を活用した研究の可能性の拡充が期待される。

デジタルデータの利便性の一方で、現物を見て、触れなくてはわからない情報のいかに多いかについても、改めて見直される必要があるだろう。たとえば、東京創元社の完全複製版の制作や株式会社大入による修復を通して、『貼雑年譜』を構成する素材の多様なこと、乱歩の具体的な製作過程やその痕跡など明らかになった事実や疑問点は多い。また、今回改めて原本を確認したところ、第1巻の「平井家父祖文書目録抄」（1～2頁）、「早稲田大学在学中ノ文反古類目録抄」（19～20頁）、「此時代ノ文反古ノ残ツテキルモノ」（39頁）の各ページには雲母引紙が使用されており、それが台紙に貼付されていることがわかった。一例に過ぎないが、こうした素材や作業方法等の精細な考証にはデジタルデータの限界もあり、現物調査もあわせておこなうことで、『貼雑年譜』という稀有な資料の実態解明につながっていくにちがいない。

6 結びにかえて——乱歩の「私」へのまなざし

現存する『貼雑年譜』には見あたらないが、第1巻の表書きには「門外不出」と大書してあったという。そして、冒頭の「序」は、以下のように結ばれる。

これはむろん他人に見せるものでなく、主として私自身の備忘と慰みのためのものであるが、兼ねて又、私の家族、子孫にとつては、かういふものにも何等かの興味があるのではないかと考へてゐる。

しかし、ほんとうに『貼雑年譜』は他人に見られることを想定していなかったのか。たとえば「序」のあとにある「参考文書目録」には、こう記されている（1_004）。

本帖ニ貼付セル探偵作家時代ノ印刷物ニハ主トシテ外カラ見タ私トイフヤウナモノガ語ラレテキルノdealガ、コレニ対シテ私カラ私ヲ語ツテキルモノニハ、別ニ、「探偵小説十年」「探偵小説十五年」其他多クノ随筆類ガアル。左記ノ○印ヲツケタモノハソウイフ随筆ヲ取メタモノdeal。本帖ト併セ見ルベシ。又他ヨリノ批評ノ纏ツタモノハ左記△印ニ取メテアル。是亦併セ見ルベシ。

戸川安宣氏がしばしば指摘しているように、ここには「見ルベシ」と二度くり返されていることに鑑みれば、『貼雑年譜』が「他人に見られることを想定したものであることは歴然としている」（江戸川乱歩『貼雑年譜』完全複製版二分冊、解説冊子、前出）と考えるのが自然にもおもわれる。

乱歩の上のような記述は、土蔵2階に設置された「保存用自著箱」（乱歩が自著等をみずから年代順に整理した箱）の棚に貼付してある細かい注記¹²とも重なってくる。中島河太郎の「乱歩のナルシズムは将来の名声を予測したような自負の念に裏打ちされているように思われる」（「貼雑年譜」について）前出）といった指摘にも改めて耳を傾けるべきであろう。

また、乱歩は自ら「日記といふものを殆んどつけてみない」（『貼雑年譜』序）、「日記が書きつづけられない性分」（『探偵小説四十年』自序）としばしば述べているが、実際には日記も小まめに書いていたようだ。

若い頃からの日記が大量に残っていたのだが、死去の数年前、パーキンソン病で身体が不自由になった頃に全部焼却してしまった。筆者の家内が父の目前で焼くように命じられたのである。家人をも含めて、死後、他人に見られることを嫌ったのであろう。この頃の父は明らかに死を予感していた。日記の焼却は、いわば身辺整理の一環としての行動であったと思われる。／〔略〕焼却の際、筆者の家内はたとえ一冊でも記念に保存しておこうと考えたが、父が目を離さないで実行できなかったということである。

（平井隆太郎『乱歩の軌跡』前出、226頁）

山前讓氏が「断片的に残されている資料から類推すると、デビュー前も、そしてデビューしてからも、日記あるいは備忘録に類するものは書き続けていたと思われる。ただ、それは『探偵小説四十年』には生かされていない。あくまでも、「貼雑帳」に貼られた資料をもとに書かれていった」（「資料不足の戦中、駆け足の戦後」前出）と述べていることも注意しておこう。

そうした背景もふまえ、乱歩が『貼雑年譜』を作成した際、そこに貼り込まれなかった資料等が、テーマ別に複数の大型封筒にまとめられていることも忘れてはなるまい。『貼雑年譜』の「参考文献」に「模造紙ノ袋ニ収メタル文反古 十一袋」とあるのがそれで、参考までに記せば、詳細は以下のとおりである（1_004）。

各袋ニ夫々次ノ表記ガアル。(1) 大学時代 (2) 鳥羽造船所「日和」編輯時代 (3) 「自治新聞」編輯時代 (4) 團子坂三人書房時代 (5) 浅草オペラ後援會・少年雑誌 (6) 活動寫真論文 (7) 「東京パック」 (8) レコード音樂會 (9) 職業指導論 (10) 社会局、工人俱樂部、大阪毎日新聞時代 (11) EXTRAORDINARY (コレニハ探偵小説関係ノ文反古イロ／＼保存シテアル)

たとえば「(11) EXTRAORDINARY」には乱歩の小説の草稿などが取められ、これまでに大衆文化研究センターの刊行物（『センター通信』『大衆文化』）で紹介されてきたものもある。くわえて、前述した切抜通信社から届けられた地方紙も含めた記事等のうち、『貼雑年譜』に貼り込まれなかったものが大量に残っている。その選別はいかになされたのか、という問題も検討が必要になってくる。『貼雑年譜』の全体像が公開されたのちは、それらの整理・発信も、大衆文化研究センターが進めていくべき仕事としてある。

乱歩が「私」をどのように見ていたのか。それをどのように残し、どのように（誰に）伝えようとしていたのか。『貼雑年譜』からは、江戸川乱歩／平井太郎の息づかいと、彼を取り巻く時代が浮かびあがって

る。オンライン版『貼雑年譜』の全巻公開が、今後の乱歩研究、ひいては日本探偵小説（史）研究に資するものとなることを願う。

※引用文中の〔 〕内や傍点・傍線はとくに断りのないかぎり引用者による注記である。改行を／で示した箇所もある。

-
- ¹ 引用は、江戸川乱歩『わが夢と真実』光文社文庫、2005年、296頁。
 - ² 「探偵小説三十年」は、1954年11月に岩谷書店から同題で単行本化。
 - ³ 引用は『探偵小説四十年（上）』光文社文庫、2006年、18頁。
 - ⁴ 「探偵小説三十年」から「探偵小説三十五年」への移行、連載用の『貼雑年譜』の資料整理にともなう休載の経緯等については、江戸川乱歩『探偵小説四十年（上）』（前出）の新保博久氏による「解題」（761～763頁）、同『探偵小説四十年（下）』（光文社文庫、2006年）の山前讓氏による「解題」（797～799頁）を参照した。
 - ⁵ 引用は『探偵小説四十年（下）』前出、797～798頁。
 - ⁶ 引用は『探偵小説四十年（下）』前出、799頁。
 - ⁷ 引用は『探偵小説四十年（下）』前出、48頁。
 - ⁸ 引用は『探偵小説四十年（下）』前出、99頁。
 - ⁹ 引用は『探偵小説四十年（下）』前出、450頁。
 - ¹⁰ 引用は『探偵小説四十年（下）』前出、455頁。
 - ¹¹ <https://www.youtube.com/watch?v=812RSfaZar8>（2023年10月31日最終閲覧）
 - ¹² 特注の棚に、自著を入れた20箱が年代順に前後二列で収められており（21箱目は別置）、棚の柱部分に四枚の貼り紙——「表側と裏側に二重に箱が並んでいる。表側／には大略年代順に自著全部が揃っている。」「裏側には予備として表側の箱と同じ本／が入れているが、この方は欠本が多い。」「赤字は合著または私の作や私へ／の批評が一部に収められた本。〔この紙のみ朱書き—引用者注〕」「詳しくはハトロン表／紙の自著目録を見よ。」——がある。